

自序

私は、昭和二十七年九月五日、官を辞し、第二十五回総選挙を踏台として、けわしい政界に身を投じた。もはや私は代議士であって官僚ではない。しかし、本書は、財政官僚として私の半生を回顧した貧しい生活記録である。

農家に生れて農村に育ち、大学を卒えて大蔵省に勤務した私は、よき師・よき先輩・よき友人に恵まれた四十年の多幸な半生を送ることができた。勿論、私は尊敬されるような人物ではないが、たしかに、多くの人々に親しまれ愛されてきたものと言えよう。またこれという才能や財産があるわけではないが、こうした人々の恩顧と友情が、私にとっては、掛替えのない大切な財産である。今後更にも多くの人々との連鎖に恵まれることであろうが、それがまた珠玉のように尊い宝物であってほしいと念じている。

これ等の人々との敦厚な交際を通して、常に渝らない厚誼を続けたいと念じているが、事實消化しきれない程の仕事の山のように抱えている私にとっては、思うに任せない怨みがある。政界においては、多少共手馴れた財政の分野で応分の御奉公をいたしたいと希い願っているが現在の財政の在り方については、不満と失望を重ねることのみ多く、徒らに焦慮と苦悶を続けつつ、新しい活路を摸索している有様である。

本書は、友人如水書房主鈴木英之君の熱心な勧奨に従って世に問うことにしたものである。これは、私を廻る多くの先輩・知己・同僚に対し私の内面の消息の一端を伝える鳩であつてほしいと思つているが、同時に財政についての断想や寸見に対する大方の高評を仰いで、自らの眼識成長の起点にしようという素志に出たものに他ならない。

本書は、第十六国会中、炎暑と闘いつつ、寸暇をぬすんで筆を執つた記録であつて、もとより、十分想を練り推敲を重ねたものではない。問題の選択や理解も未熟と偏見に満ちたものであり、先人の業績に対する見方も正鵠を失し非礼にわたる部分が一、二に止まらないことを虞れる。しかし、それら一切の欠陥は、向後の教示と叱正を仰ぐよすがにしたいという私の虚心に免じて、寛恕を願いたい。

最後につけ加えた「アメリカの点描」は、一昨年のアメリカ紀行の途次、私の直観に映じた彼の国の政治、経済或は文化の大胆なデッサンであり、当時四国新聞に連載したものである。稍々旧聞に属するが、特に改訂すべき箇所も見当たらないので、そのままここに綴り込むことにした。

本書の出版は、津島壽一、池田勇人両先輩の剴切な御助言、神崎製紙社長加藤藤太郎先輩のこまやかな御配慮、鈴木英之、岩倉淳一両君の熱心周到な助力に負うものである。記して以て深厚なる謝意を表す。

昭和二十八年十月一日

政界進出満一週年を記念しつつ

大 平 正 芳